



## 「思いっきり自己表現ができる場」を求めて 「雪ん子劇団」を創り、育てた仏者

雪山 隆弘 (1940～1990)

隆弘は、昭和15年(1940)、大阪府高槻市の浄土真宗常見寺の次男として生まれた。

当時は学校演劇が盛んで、隆弘は、自身が通う如是小学校の児童劇団に入った。大阪府の児童劇コンクールで2位になったことがきっかけで、吉岡たすく等の指導を受け、少年時代はラジオドラマの子役タレントとして活躍した。

昭和34年(1959)、早稲田大学文学部演劇専修に進んだ隆弘であったが、大学での演劇に満足できず、劇団「四季」や「劇団青俳」に籍を置き、演劇活動に没頭した。劇団青俳の木村功等に大きな影響と刺激を受けた。しかし、大学4年生の時「食っていくのは大変。いや、食っていけない。」という実感から、迷いに迷い、俳優の道を断念した。

大学を卒業した昭和38年(1963)、(株)産経新聞社に入社、社会部遊軍記者となった。その後ニッポン放送に出向し、ラジオのパーソナリティも経験した。この頃のジャーナリスト活動を通して、いろいろなものを見、いろいろな人に会ったことがその後の地域文化活動の基本になった。この間、北日本放送のアナウンサーをしていた雪山玲子と結婚した。

昭和48年(1973)、隆弘は妻玲子の実家である善巧寺(宇奈月町浦山)の後継者として得度すると、善巧寺を「開かれた寺にしたい」と考えた。旧知の永六輔の協力を得て落語会を開催すると、毎回多くの人々が集まった。また、心豊かな子供たちを育てようと日曜学校を開き、寺を文化活動の場として開放した。だが、もっと自己表現できる場として児童劇を始めたいと隆弘は考えた。妻玲子も共感し、昭和54年(1979)11月25日には、ことばの教室“雪ん子劇団”を誕生させた。劇団の稽古では、顔、目、あご、口の体操やことばの体操に加え、反射神経や感情の開放を遊びを通して身に付ける「手つなぎ鬼ごっこ」を取り入れた。隆弘は、これを雪山メソッドと呼んでいた。

4か月後の昭和55年(1980)3月26日、500人余りが集まった富山本願寺でのミュージカル『うちのとうちゃんえらいんだ』、ぬいぐるみ劇『なかまたち』が雪ん子劇団の初舞台となった。以降劇団の公演は、県内外で年間5～10回行われ、多くの人々に知られるようになった。「自分のことよりちょっと他人のことを」の思いを大切に、開かれた寺にしたい、豊かな表現力を育てたいと一日一日を精一杯生きた隆弘であったが、病に倒れ、劇団創立から11年目の平成2年(1990)9月、生涯を終えた。享年50歳であった。創立以来、県内外での公演数は80回を超えていた。

隆弘が逝去した翌年の平成3年(1991)、雪ん子劇団はその教育的意義と活躍が高く評価され、正力松太郎賞を受賞した。隆弘(男先生)の思いは妻玲子(女先生)や子供たちに引き継がれ、活動はその後も続いた。しかし、平成27年(2015)3月21日、多くの人々に惜しまれつつ、劇団は35周年記念さよなら公演を最後に幕を閉じた。

専門員 根塚 昌志

## 平成29年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



### 自由民権運動に女性の地位向上を懸けた女性活動家

中川 幸子 (1857～1910)

安政4年(1857)、西加積村上島(現滑川市上島)に生まれた。

17歳で豪農の若旦那と結婚したが、家庭を顧みない放蕩三昧の生活に耐えられずに23歳で離婚。深い悲しみの中、ルソーの「社会契約論」に感銘を受け、もっと自由な人間として生きていくために、学び、人の役に立つ活動をしようと上京した。

文明開化で新しい思想が入ってくる中、知識を男性と同じまでに引き上げようと日夜勉学に励み、男尊女卑の考えが中心だった当時の社会の中で、幸子の目は女性の地位向上のための運動に向けられていった。

自由民権運動が全国に広がる中、幸子ははじめ頭山満の門下に入る。その後、板垣退助の門下に入り、尾崎行雄や犬養毅等とも親交をもった。

女性運動家は当時極めて珍しく、神奈川や東京の各地で男女同権演説会を開催するなど、「民権の三女傑」の一人と称された。

明治35年(1902)、東京麹町に苦学生を支援する私塾「三省学舎」を開き、国の役に立つ次代の人材を育成しようと青少年の教育に力を傾けた。

専門員 松井 功一